

韋編

いへん

愛知大学図書館報

No.37

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、
なめし皮の紐でとじた上古の書物。

わたしと本と図書館

図書館長 荒川清秀

世には、ためこむのが好きな人と、捨てるのが好きな人がいる。ためこむのが好きな人は本でも洋服でも、ゴミでもためこむ。だから、部屋はいつもいっぱいだ。誰にどう言われても気にならない。それがこのタイプの人の特徴である。

■ 本を買うのが好き

わたしの妻はあまり本を買わない。それでいて、市の図書館へ行つては、面白そうな本をたくさんみつけて借りてくる。これは小さいときからの習性だそうで、妻にとって図書館は読みたい本の宝庫だそうだ。しかし、わたしは新刊書を図書館で借りて読むことはほとんどない。読みたい本はたいてい買う。読みたい本があっても、出たばかりの本はまず図書館にない。たとえ、入っていたとしても誰かに先に借りられたりすると読めない。本が手に入るころには読む気が失せてしまう。だから、ほしい本はたいてい買ってしまう。わたしは27歳のときに愛大に就職した。就職して一番うれしかったことは、本が好きだけ買えるようになったことである。



■ 研究室の書架

今わたしの研究室には8段の書架が25本と、床にはおそらく数本分に相当する本が積まれている。まるで古本屋さん のようだ。(二

人の同僚の研究室にも書架を5本ほど借りて置かせてもらっている。)窓際の机の前まで行くのに、かつてはまっすぐ歩けたのに、いつのまにかカニ歩きでないと通れなくなった。

床に積んである本は、ちょっと体が触れたり、部屋が揺れたりすると崩れる。朝研究室にやってきてドアを開けたら通路がふさがっているということもときおりある。地震が起きたら、本が落ちてきて、きっと外へは出られまい。評議員をしているとき、会議の席で、縄梯子がほしいと訴えたが、まったく相手にされなかった。(これで死んだら本亡く望だ)

■ 本もずいぶん処分した

ためこむばかりで処分しようとしたわけではない。旧研究館から5号館の研究室に引っ越ししてきたときに、それまで書架の裏側に置いてあった本はほとんど処分した。知り合いの古書店に売ったものもあるが、大部分は学生(主に院生)にあげた。処分コーナーをつくって、紙に「何冊でもご自由におもちください」と書いておいたら、あっという間になくなった。段ボール箱で持っていた学生もいた。今も同僚の部屋の前にそういうコーナーを設けているが、ここでは持っていく人が限られる。図書館にも常設コーナーがあるので、そこをもっと利用するといいのかも知

れない。教員は本の処分もできるし、学生もただでもっていけるので本の再利用になる。5号館の研究室に引っ越してからも、東京の古書店が地方巡回をしてきた折に、まとめて大量にやや専門外の本を売ったこともある。売るときに、買ったときの金額を考えていては売れない。自分にとってどんなに大切だった本でも、他人には二束三文かもしれないからだ。空間をつくるために売ると思えばいい。あきらめが肝心だ。その後も、段ボールに何箱か集まると知り合いの古本屋さんに運びこんだりしているが、本はなかなか減らない。

退職まで10年をきった。昔は、教員がやめたら図書館で引き取ってくれることもあったが、今はそんなことは不可能だ。めぼしい本だけとられるのも面白くない。だから、貴重書については、懇意にしている古書店にオークションでも聞いてもらおう売りたいと思っている。あの本は、体の自由がきく間にどれだけ処分できるかである。

■ 言ってはいけないことが二つある

講義のときに学生によく言うことがある。わたしの部屋に入ってきて、言ってはいけないことが二つあると。一つは「先生、この本全部読んだんですか」である。そう聞かれたら「愚問じゃ」と答える。研究室にある本を全部読んだ人などいないだろう。たとえ読んだとしても、その内容をすべて覚えているはずはない。わたしはホームページにブックログというコーナーを設け、読んだ本の感想を少しづつ書いていたりしているが、それはそうでもしないと、その本の記憶がだんだん薄れていってしまうからである。すぐ読まない本を置いてあるのは、いつか使うためであり、いつか読もうと思っているからである。だから、その本が何について書いた本かは知っている。(そうでなければ買うはずがない)ある問題について知りたいとき、この本を見ればいいという予測のもとに買っておくのである。

もう一つの禁句は「先生この本面白そうだから貸してください」である。これに対する答えは――「だめ」。ケチと思わないでほしい。貸さないのは、利用したいときにその本がな

いと困るからである。それに、それまでほとんど忘れていた本なのに、貸した後、妙に読みたくなることがある。不思議なものだ。原則貸さないのだが例外はある。学生が卒論とかを書く際、図書館にない本、誰かが借りて利用できないときは貸したりする。しかし、ふだん学生に言うのは「この本面白いよ。図書館で探してみて」である。冷たいようだが、学生に安易に本を貸し与えるのは決して学生のためにならない。学生が自ら探す力を削いでしまう。昔、ある一年生の学生に貸したら、卒業前に返しにきたことがあった。安易に貸すとそんなことがおこる。そんなこともあるので自分の部屋の本は原則貸さない。

■ 個人研究図書費は個人のために使わない

個人研究図書費（個人研究費ではない）の執行については各教員に委ねられているが、わたしは、個人研究図書費はほぼ全額、大学の中国書の充実のために使う。自分用に買うことはほとんどない。図書館から本を借りていて、学生から請求があればすぐ返す。永く使いたければ自分で買う。あまり偉そうなことは言えないが、自分の個人研究費で買った本以外の本を死蔵するのはよくない。永く利用したいなら自分で買えばいい。

それはともかく、わたしは借りるより買う方が落ち着くので、図書館で借りても、これは手元に置いておきたいと思ったら、たいてい自分で買ってしまう。だから、大学、大学院時代を通し、正直それほど図書館を利用した記憶がない。基本的な本は各専攻の研究室にそろっていたということもある。それより、よく使う本は大学院のころから自分で買っていたようだ。だから、愛大に赴任したときも、段ボールでかなりの数の本を家と研究室に運びこんだ記憶がある。

■ 図書館をありがたいと思ったとき

そんなわたしが図書館を利用するには、専門外の本を利用したいときである。1980年代に、日中の共通の漢語の起源を追いかけたとき、愛大図書館はとても役にたった。調べたのは17世紀以降にできた「熱帯」「回帰線」

「海流」「貿易風」「半島」といったことばで、古い辞書はもちろん、いろんな分野の資料にあたる必要があった。その多くを愛大図書館はもっていたし、自分で買えない高価な本は図書館で買ってもらった。(そんなときは学部の図書費が運良くあまつたりした)その中心はいわゆる中国の洋学(西学)書で、ロバート・モリソンの『中国語辞典』をはじめ、多くの本をこの時期集中的に買ってもらった。(その後も同僚の塩山さんとともに買い続けている)このときほど愛大図書館のありがたみを感じたことはなかった。もちろん、愛大だけでは足りないので、自分でもたくさん買ったし、国会図書館、内閣文庫、天理図書館、東北大学図書館等々の国内の図書館をはじめ、イギリスの大英図書館にも4年通い、1997年に『近代日中學術用語の形成と伝播』(白帝社)という本にまとめた。(これでうちに学位をもらつた)その際、自分で買ったものの中で一番高かったのはロプシャイトの『英華字典』である。これなどは離婚でもしないと買えないと思ったほどだが、不思議なもので、NHKラジオの仕事が入って、そのお金で買うことができた。先にオークションでも開きたいと書いたのはこの頃集めた本である。

中国の図書館は当時利用が面倒だったので、ほとんど利用せず、中国の古書店で19世紀から20世紀にかけて出た英華・華英字典の類、地理・科学書を広く買い求めた。最近はいい本が出ないので、あまり回らなくなつたが、わたしが北京や上海へ行く主な目的は古書店巡りである。友人の関西大学の内田慶市さんなどは、上海に留学した一年の毎日を古書店巡りについてやしたそうだ。これによって上海のめぼしい古書はほぼ枯渇したとさえ言える。(実際ほとんどない)

中国もそうだが、国内の図書館でも、何回か通えばそれなりにお金がかかる。それで、何回か通えば買えるほどの金額のものは、古書店にモノが出れば買い求めた。本とは不思議なもので、「求める人のもとにやってくる」のである。最近はこの方面の情熱が衰えたのか、古書市場が枯渇したのか、自分にとってめぼ

しい本がほとんど出なくなった。こうしたことでも「ためこむ」習性のなせるわざで、これは死ぬまでつづくだろう。

■ 本をさがす

その内田さんは中国語の世界では有名なパソコンの達人である。そのかれがアメリカ、ボストンのハーバード大学に研究留学で出かけたときに書いた本に『ハーバード電腦日記』(同学社)がある。この中で内田さんは、パソコンを使って、自分の必要な資料を探し求めると同時に、毎日のようにハーバード大の燕京図書館の書庫に入り、書架をなめるようにして見てまわったという。今、わたしたちは図書やデータの検索ではずいぶん便利になっている。しかし、大事なことは目的とする本をピンポイントで追い求めるだけでなく、その周囲を眺め回すことである。そこに思いがけない、別の面白い資料、本が待っているかもしれないからだ。(同じことは紙辞書にも言える。電子辞書だけでは、辞書を使ったことにならない。)



NHKテレビ「体あたり中国語」のメンバーと

■ 図書館のあり方

(1) 貴重書の公刊

その内田さんは、現在自分の本を含め、関西大学の西学東漸に関する辞書、書籍をつぎからつぎへとマイクロフィルムに撮って公開しようとしている。資料は広く公開すべきだというのである。わたしも、かれの必要とする貴重な本を譲ったり、わたしの欲しい資料と交換したりしたことがある。ただ、それはお互いに、他人が苦労して手に入れた書物に対

する敬意があつての話である。そうでなく、自分が苦労もしないで、人の持つている資料を公にするのは当然のごとく要求する人が時にいるが、それはどうかと思う。いや、自分が苦労して資料を集めている人ほど、人の資料を借りるのは畏れ多いものである。

もちろん、国会図書館のように国民の税金でまかなわれている図書館、研究機関については、予算の許せる限りそうしてもらいたい。しかし、個人や私学の資料について同じように言えるかどうかは問題だ（私学も国庫助成は受けているから、そこの図書もまったく私的なものとは言えないが）。天理大学や早稲田大学のように、早くから貴重書の公刊をしているところもある。そして、わたしたちはそうした本を多少の金銭的犠牲を払えば利用できるようになってきている。愛大にも、他の大学にない貴重な図書、資料がたくさんある。その一部はすでに公刊しているし、その他の資料もやがて公刊して、一般の研究者の利用に供するときがくるだろう。これは時代

の趨勢でもある。大事なことは、あえて貴重書を公刊に踏み切った大学、大学図書館に対する敬意を常に失わないことである。

（2）図書館をどう変えていくか

最近の図書館は、本を読んだり調べたりするだけでなく、語らいの場、集う場であることを求められているようだ。大学の中で、学生が集まる場所が少ないとたしかだ。しかし、静かに本を読んだり、調べものをしているときに、横でおしゃべりをされてはたまらない。これは分煙のようにすべきである。

今の愛大豊橋図書館の1階を見ていると、平机に集って話をしている学生もいるので、その並べ方にも問題があるようだ。可能であれば、同じ1階の壁際の席のように一人一人の席を区切るとよい。試験のシーズンには30分以上離れると荷物を撤去するなどの条件をつけて、指定席にするのもよい。また、図書館での飲食についても、一部コーナーを設けるなどの検討も今後必要となろう。

愛知大学に電子図書館は訪れるか？

法学部教授 中尾 浩



今年（2010年）に入つて電子書籍や電子図書館などの話題が以前にも増して賑やかになってきた。肯定派、否定派、各人各様の考え方があるだろう。大学という職場で働いている以上、書籍と無関係では教育も研究もできないので、今後どのように時代は動くか、愛知大学全体として、あるいは私個人として、どのように対応すべきか、といったことを考える機会が増えてきた。

個人的には、紙の書物には愛着がある。田舎の実家に帰ったときに、子どもの頃や学生

時代に読んだ本を手に取ると、書物の手触り、重さ、古書独特の匂いなどが、当時のことをさまざまと思い出させてくれる。子どもの頃に書きなぐった落書きや、高校生の時の生意気な書き込みなどを見ると、自分のことながら微笑ましくなってくる。

そうしたことは、電子書籍には求めにくいだろう。確かに、技術的には書き込みしたり、それを何層にも重ね合わせる（つまり、読む度に新しく書き込みができる）など、おそらく今現在の技術でも不可能ではあるまい。しかし、電子書籍には基本的に手触りも重さも匂いもない。あるのは再生機器である携帯電話、

電子書籍リーダー、パソコンなどの手触りや重さであって、子どもの時に読んだ絵本も、高校生の時に読破した大河小説も、基本的には同じ再生機器の中の1ファイルに過ぎない。吉川英治の『新・平家物語』は紙の文庫本で24冊にもなる。これはすでに電子書籍化されていて、紙の文庫本と同じく24分冊ファイル全てを携帯電話に取り込むことなど簡単である。24冊の文庫本と携帯電話では一見したところ全く別物のように思えてしまうが、『新・平家物語』という書籍の中味は同じだ。

ここに重要なことがらが隠されている。我々は書物に物質性をどうしても求めてしまう。紙の書籍の場合、文庫本と全集の1冊では大きさも重さも違う。新刊書であるか、古書であるかといった違いなど、書物はさまざまな物質性や属性の集合体である。それは書物が物質である以上、しかたのないことであり、それを否定することは意味のないことかもしれない。ところが、電子書籍は、ゼロではないが、基本的に物質性を限りなく欠いている。もちろん、携帯電話で読むか、パソコンで読むかでは、重さも画面の広さも全く違うのだが、電子書籍の場合、その違いはあまり重要視されない（この問題が重要性を持つことについては別の機会に論じてみたいと思っている）。おそらく携帯電話で読むかパソコンで読むかの違いは既成事実として事前了解されているからだろう。つまり、電子書籍を読む場合、肯定派も否定派もある一つの真実を敏感に感じ取っている。電子書籍は（全く無縁ではないとはいえる）物質性から限りなく遠い、ほとんど「むき出しの情報そのもの」に過ぎない。かつて書物が持っていた、物質性や付帯的属性がほとんど剥ぎ取られて、書物の中味、情報のみが自立している。

こうした事態は情報論的には、言語学者・記号学者のソシュールが述べた、実体の同一性と関係的同一性の概念と同じである。文庫本の『坊ちゃん』と全集の中の一冊の『坊ちゃん』では実体的な（物質的な）同一性は異なっている。しかし、夏目漱石の一作品という関係

論的な観点からいえば、文庫本であろうが全集の中の一冊であろうが同一である。従って、携帯電話で読もうが文庫本で読もうが、『坊ちゃん』は『坊ちゃん』である。文庫本で読んだ『坊っちゃん』には感動できたが、携帯電話で読んだ『坊っちゃん』では、感動できなかつた、というのは、読書人の感情としては理解できなくはないが、根本的に書物を誤解していると言わざるを得ない。書物の第一の機能は、身も蓋もない言い方になるが「情報を運ぶこと」に他ならない。我々は紙に印刷されたものだけでなく、石に刻み込まれたものにも、羊の皮をなめしたものに書かれたものにも感動してきたし、それから多くの情報を得てきた。もしかしたら、過去には、薄っぺらい紙に書かれたものは駄目だ。石に刻み込まれた詩でなければ味わいがない、などというつぶやきがあったかもしれない。新しい媒体が出てくるときには必ずそのような軋轢がある。しかし、人類は媒体の方ではなく、情報の方を選択してきた。もし媒体の方を選んでいたら、今ごろ我々の身の回りは石だらけになっていたかもしれない。



ロゼッタストーン(注1)

紙幅も限られているので、結論から書けば、遠からず、愛知大学にも電子図書館の波は訪れる。10年後には（あるいはもっと早い時期に）、図書館に納入される新刊書の大半は電子版で、学生も教員も携帯電話や電子書籍リー

ダーに取り込んで、貸出期限後には自動的に再生機器から消滅する、といった貸出方法になるかもしれない。何とも味気ない話だが、返却忘れはなくなるし、契約内容次第では、返却を待つ必要がなくなる、図書館の収納場所も大幅に縮小できる等といった利点もある。



Apple社のiPad(注2)

授業の形態も変わってくるだろう。たとえば今までなら授業中に学生に何かを調べさせたいときに、わざわざ図書館に行くのはあらかじめそのように予定していなければ、50人の学生をいきなり図書館に連れて行って、そこで何かを調べさせるということは難しかった。しかし、電子書籍になってしまえば、教室でいくらでも調べることができる。辞書も教科書も電子化されてしまえば、教科書は持ってきたけれど、辞書や六法を忘れた、といったこともなくなるだろう。電子書籍リーダーさえ忘れたら？ 大学に来ても意味がないので、逆に忘れ物が減るのではないかと期待している。出席機能（もちろん、遅刻・早退も確認する）もつければ、学生の授業出席を促すかもしれない。電子書籍や電子図書館には欠点もあるだろうが、長所も多いと思われる。

しかし、何をも電子化すればよいとは思えない。書物はおそらく大半が電子化されるだろうが、学生は授業中にパソコン等に授業

内容を入力することになるだろうか？ それは教育上、決して有益ではないと思われる。教科書や辞書は情報を得るためにものである。それらが紙媒体であろうが、電子媒体であろうが、情報を運ぶといった本質的な役割は変わらない。しかし、授業の内容をノートする、メモする、というのは速記録を作ることではない。授業の内容を咀嚼し、理解することが目的だから、逆に今まで通り、紙のノートに自筆で書く方が教育効果は高いのではないかと現時点では思われる。もちろん、画期的な技術が生まれる可能性はあるので、自筆ノートが未来永劫よいわけではない。手書き入力の使いやすさもさらに進化することだろう。

大学は今後、否応なく、さらなる電子化を迫られる。そのときに忘れてはならないのは、教育の理念や大学の本質である。学ぶとは何か、教えるとは何か、教養や知識とは何か、といったことがらをさらに深く考える必要がある。それを忘れて、単に何でも電子化しさえすればよいというのはあまりに短絡的だ。電子化を拒んで、社会の動きからかけ離れてしまうのも問題である。基盤は整備されてきたし、黒船も到來した。大学も社会もこれから先、多くの変化に取り組む必要がある。そのときに、本質的に重要なことを見失わないように、変化に立ち向かっていくことが重要で、電子書籍や電子図書館の衝撃は、今すぐにでも取り組むべき課題になったと言えるだろう。

注1：大英博物館のWebサイトより
<http://www.britishmuseum.org/explore/highlights/image.aspx?image=an16456b.jpg&retpage=15633>

注2：Apple社のサイトより
<http://www.apple.com/jp/ipad/apps-for-ipad/>

『日本の会社史（マイクロ版）』の紹介 －実用的利用案内－

経営学部准教授 山本 大造



このたび愛知大学図書館に、「平成21年度私立大学等研究設備整備費補助金」を受けて、由井常彦（明治大学教授）、伊牟田 敏充（法政大学教授）編集代表による

『日本の会社史』マイクロ版（丸善）のコレクションを備え付けていただきました。申請、購入から配架まで、図書館職員のみなさんをはじめ、担当教職員のみなさんには、本当にお世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

それにしても、ものすごい量のマイクロフィルムです。実に440リールが、十数本単位を1ケースとして、名古屋図書館3階のマイクロ室に整然と収められています。その分量ゆえに、このコレクションのためだけに1つのラックが用意されています。まずは、『総合目録』をみて、産業分類か、企業名で目的のリールを探しましょう。

収録されている産業分野は、農林水産・食品製造から、建設、化学、鉄鋼・金属、造船、機械、自動車、電力・ガス、非鉄金属、鉄道・海運、商業・不動産、金融・証券、生保・損保まで多岐に及んでいます。そこに支部や事業所ごとの「社史」まで含めると、1,146社の社史が収録されています。ランダムに挙げるとトヨタ自動車からスズキ自動車、ニッタからINAX、森永乳業からプリマハム、大丸百貨店から名鉄百貨店、東海銀行から伊予銀行等々まであります。その多くは、1980年代ごろまでに各社が発行した社史です。

こうした資料を一つところで、閲覧したり

比較検討することは、これまでありえなかつたことです。社史は、発行されてからかなり時間が経っているものも多いため、神保町の古本屋街を回っても、目的の社史が簡単には手に入らなくなっていました。同一産業に限っても、複数社の社史をしかも「10年史」とか「30年史」とか複数発行されているものを集めるだけでも、相当な時間と労力が必要です。今回、このコレクションの備え付けによって、そうした労力が大幅に軽減されると同時に、これまで入手困難だった社史も閲覧できるようになりました。愛知大学図書館は、有力な研究環境をさらに整えたと言えるでしょう。

さて、目的のリールが見つかったら、図書館の受付フロアにあるマイクロフィルム・リーダで閲覧です。フィルムのセット方法は、最



初は戸惑うかもしれません、一度やってみると簡単です。ちなみに、フィルムの幅を示す「フィルム・セレクタ」は16にセットしましょう。フィルムの圧縮率はかなり高く、文字がとても小さく見えますから、ズームレンズは‘GZ×14-30’を用意してもらいましょう。どうやらこれが一番ズームの利くレンズだとのことです。必要なページの印刷もできます。印刷は、「マイクロリーダー利用申込書」に必要事項を記入の上、10円／1枚で印刷できます。

インターネットやDVD資料が普通に利用できる昨今、マイクロ資料の利用は実にアナログで、古風な感じがします。私自身も、前世紀中に『国會議事録』などを読むときに利用して以来、しばらく使ってませんでした。実際、見やすさからしたらDVD資料に比べてかなり見劣りがします。長時間見ていると目が痛くなったりしますから、時間のあるときにこつこつ読んでいくことをお勧めします。それでも、今回のコレクションは、読めば読むだけの価値や発見、楽しさがあることは請合いです。

社史を読む楽しさは、まず常識的に言われていることを元資料でもってあらためて確認して、研究や授業用の事例開発に生かしたりできることです。

例えば、2007年J.フロントリテイリングのもとに松坂屋と経営統合を果たし、この地域でも話題となった百貨店の大丸は、下村彦右衛門正啓氏が伏見京町で1717年に創業した呉服店「大文字屋」を起源としています。創業者下村氏は、早くから「先義而後利者榮」＝「先義後利」を社是として掲げました。この社是の下、顧客第一を旨とする商いは人々に受け入れられることとなります。1937年大塩平八郎の乱のときも、大塩は「之義商也犯すべからず」として、大丸は焼き討ちを免れたと言います。このエピソードは、今でも同社の新入社員研修や奥田努氏（現J.フロントリテ

イリング会長兼CEO）の講演などでも繰り返し語られています。こうしたエピソードも聞いただけでは、研究や事例としてまだ使えません。社史があれば、より細かい資料とともに活用できるようになります。

次に社史は、言うまでもありませんが、基礎的な研究の入り口にもなってくれます。もちろんその会社公認の出版物なので、別のアプローチからの裏付けが必要になってくる場合も多いのですが、その分引用にためらいが生じません。社業の通史や概要を理解するだけでなく、その時々の困難や課題に立ち向かった人々のエピソードをエッセイ調の文章で読むこともできます。創業時のエピソードや関係者の文章からなる社史は、インターネットで公表されているCSR報告書や企業概要などとは異なる味わいや発見があります。

例えば、航空会社を表記するさいに、航空会社コードが用いられています。日本航空は‘JL’、アメリカン航空は‘AA’、ブリティッシュ・エアウェイズは‘BA’といった具合です。しかし、全日空は正式名称を「全日本空輸株式会社」といい、英文表記も‘All Nippon Airways’なのに、‘AN’とか‘NA’ではなく、‘NH’となっています。これは、創業時の名称「日本ヘリコプター輸送」から持ってきているからです。なぜ現在、日本を代表する航空会社の一角なのに、ヘリコプターの会社から創業したのか。このあたりのエピソードも、社史を読むと多面的に見えてきます。

さらに、社史には、もう他では得られないだろう資料が添付されていました。組織図の変遷や設備の更新計画に関する資料が添付されていることも多く、その会社の組織改革や戦略的意意思決定を理解するのにも役立ちます。また、経営学を研究のフィールドとする人だけでなく、身近な企業やサービスを調べてみたいと思う人でも興味深い話を見つけることができます。

1973年に全日空は、新ワイドボディ機とし

て‘ロッキードL-1011トライスター’（飛行機の好きな方なら全日空らしい機材の一つだったと気がついてもらえると思います）を導入しました。そのさい、機種選定にあたったのは経営企画部門や、現場のパイロット・客室乗務員、整備部門の代表だけでなく、営業拠点の支店長達も参画していました。社史には、機種選定委員会の組織図も添付されていて、営業部門の支店長達が同機の導入に強い影響力を持っていたことが記述されています。ロッキードというと、田中角栄元首相も逮捕された「ロッキード事件」に焦点が当てられるこ

とも多いのですが、現場の反応をうかがい知ることができる資料は、今となっては社史が頼ります。すぐに研究に生かされるようなエピソードではないかもしれません、私は思わず発見をした想いで、知的興奮に駆られました。

社史は、こうした宝の山、経営秘話の宝庫です。ますます多くの方が、『日本の会社史』によって埋もれかけていたエピソードや事例を発掘し、それぞれの研究や興味関心にそって役立てられることを願っています。

図書館とは何か — 辞書を読んで考える

愛知大学名誉教授 高橋 秀雄



図書館とは何か。「図書館」という語を、辞書はどのように説明しているだろうか。手元の『広辞苑』（第4版、1994）を引いてみる。

図書館：(library)（明治中期の訳語。それまでズショカンといった）図書・記録その他の資料を収集・整理・保管し、必要とする人の利用に供する施設。

文句のつけようのない周到な定義である。しかしこれは、私たちの社会にすでに確立した、いわば制度としての図書館を説明した語義にすぎない、とも言える。私が抱いた「図書館とは何か」というテーマを考えるには、この説明ではすこし物足りない。私の関心は、図書館の不思議さにある。だれでも自由に入ることができ、収集された無数の本をタダで貸してくれて、広々とした明るい部屋の、立派な机、椅子に席を占めて、ゆっくり読むことができる、

このような施設が生み出されたのは、一体いかなる思想によるものか。私たちの生活のなかで図書館はどのような意味をもつのか。そういうことを私は考えたいのだ。

そこでこんどは、『広辞苑』と同じくらいの大きさの、一冊もののフランス語辞典『プチ・ロベール』Le Petit Robert, 1984を引いてみる。フランス語では図書館はbibliothèqueというが、その第一の意味は「本箱、書架」で、2番目には「図書室、図書館」の意味が出てくる。その部分の全文と訳を掲げる。

Salle, édifice où sont classés des livres, pour la lecture. Travailler dans sa bibliothèque. **V. Bureau, cabinet, librairie** (vx.) Bibliothèque municipale, universitaire. Une bibliothèque de prêt. La bibliothèque nationale (la Nationale). – Un rat de bibliothèque, se dit d'une personne qui passe tout son temps à compulsé des livres, à fouiller dans les bibliothèques. **V. Érudit, chercheur.**

読書のための、本が分類されている部屋、建物。

「自分の図書室で仕事をする」。(関連語) オフィス、
小部屋、書斎(古)。「市立図書館、大学図書館」
「貸し出し図書館」「国立図書館」—「図書館のネズ
ミ」本の涉獵、図書館の探索に自分の全時間を
過ごす人のこと。(関連語) 博識、探求者。

語義は基本的には『広辞苑』のそれと内容は同じであるが、フランス語の*bibliothèque*という語が多義的であることによってでもあろうか、記述・構成の仕方には大きな違いがあるようだ。試みに『プチ・ロベール』と『広辞苑』の語義の部分における、対応する語を並べてみると、それぞれ、「本」は「図書・記録その他の資料」、「分類」は「収集・整理・保管」、「読書のための」は「必要とする人の利用に供する」、「部屋、建物」は「施設」となっている。比較してはじめて気づかれるのは、『広辞苑』はここではすこしおしゃべりが過ぎるのではないか、ということである。ロラン・バルトは「辞書ほど饒舌でないものがあろうか」と言っているが、寡黙であることが、逆説的だが、辞書の鉄則である。必要なことはすべて言わなければならぬが、余計なことは一切言つてはならない。さもないと、辞書の読者は想像力を羽ばたかせることができない。

『プチ・ロベール』の記述をたどってみると、図書館、図書室はまず、本が分類されて置かれている場所であり、それは本を読むためのものである。この語義を受けて、「自分の図書室で仕事をする」という用例が出される。つまり、それはなによりもまず、個人が本を読む場所なのだ。しかし、もちろん、図書館は個人のものであるというよりも、むしろ公のものである。その連想がはたらいて、「市立図書館」「大学図書館」などの用例が掲げられる。このように、この辞書は語の基本的な意味が何かを、それがどのように使われているかを具体的に見ながら、読者とともに考えて行く構成になっている。

『プチ・ロベール』の記述をゆっくり眺めな

がら、私は自分のうちにしたいに考えが広がり、図書館の不思議の核心に近づいたような気がしてきた。つまり、図書館は個人のものであると同時に公のもの、つまり社会のものである、それはそのとおりだが、図書館がもつその個�性、社会性には、他になにも見られない特質があるのではないか、なによりも、そこには義務とか強制というのがまったくない、図書館の本質は、その自由にあるのではないか、ということである。

豊橋校舎の大学図書館は大学のなかでいちばん便利な場所にある。毎日登校してくる学生はいやでもその前を通るようになっているが、かならずそこに入らなければならないという規則はない。4年間一度も図書館に入らなくても、卒業することはできる。それでも、図書館は、在学中も、卒業してからも、入ってくる学生があれば彼らを、いつでも快く迎え、彼らが原則として世界中の本を利用できるように準備して、待っている。

図書館のことを考えると、その書棚に分類して並べられ、私たちが自由に引き出して読める、その本とは一体何か、そして、本を読むとは何か、を考えずにはいられない。私は、本のことを一から考えようとして、モンテニュ(1533-1592)の著書『エセー』の第3巻第3章「三種の交わりについて」を読み返してみた。「三種の交わり」とは、第一は人との、第二は美しい女性との、第三は本との、コミュニケーションのことである。

モンテニュの生涯のテーマは、自分を研究することだ。彼にとっては、自分のなかに世界がある、自分をみつめることができ人間を、社会を考えることなのだ。だから、彼の精神はつねに沸き立つように活発に動いている。本は考えを進めるためでなく、精神の激しい動きを静めるために読むと言っているほどである。そして彼にとって考えるとは、なによりも、現実の人と向き合って、コミュニケーションをとることである。「私の精神は、新しい

考えに遭遇すると動き出し、あらゆる方向にその活力をあらわして活動を始め、それがときには力に向かい、ときには秩序と美に向かう。こうして、精神は自分を整え、抑え、強くる」。ここには、友人と真剣に議論するモンテニュの姿がよく表れている。しかし、友人との幸福な出会いはまれである。モンテニュにとって本を読むとは、古今の世界の人との、また自分との（彼にとって、自分が書いた文章も終生読み返す対象であった）、最も確実なコミュニケーションの機会であった。生身

の人間とのコミュニケーションに対する強い思いがあるだけに、彼の本に向き合う姿勢はますますいっそう真剣になったことだろう。

私は今、図書館の自由が脅かされている状況を私たちは自覚しなければならない、と思っている。図書館の危機は、今にはじまったことではないかもしれないが、それは焚書坑儒のようにあからさまにではなく、私たちの生活におけるコミュニケーションの困難という形をとて静かに進行している。

図書雑感

会計研究科教授 林 隆一



会計大学院では租税法の講義とゼミを担当していますが、本学では租税法関係の専門書が4階の車道図書館や12階の会計大学院図書室に十分備わっているとはいez、また、設置されて日も浅いため最近の図書は別にしてそれ以前の専門書や雑誌は見当たらないことがあります。租税法関係の専門書がないときは、東京の大崎駅前にある日本税務研究センターの図書室を利用しています。ここは、日本税理士会連合会の建物の中にあり、税理士会の租税法の研究機関として日本税務研究センターが設置されており、その付属施設として図書室がありますが、租税法関係の蔵書はかなり多く、もっぱら利用している方を眺めると院生と思われる方が随分おられます。ただ遠方から時間をかけて訪れ、ここで目的の書物を探し当てたとしても、1回に借りられる図書は2冊まで、借り

られる期間が2週間となっているため、利用者にとっては利用期間が若干短いように思われます。しかも、休館日は土日だけでなく図書整理のため月末も含まれ、土日の休みを利用して出かけることができず、利用者からは不満の声が出ています。数年前のことですが月末の休館日を知らずにここへ来てがっかりしたことを覚えています。

このため、ここを利用するには平日に限られるため、東京での会議の折に時間をみつけてここを訪れ利用する機会を設けています。当初からここに蔵書があることが分かっている場合で、出かける時間もないときは、日本税務研究センターの賛助会員であればFAXによる申し込みが可能です。

いずれにしても、土日利用が制限されていることは利用者にとり大変不便なことです。民間施設が土日を休館日とすることは、利用者への利便性と施設の維持費との比較の問題であり常にコスト削減を意識する組織であればそのような方向に流れてしまうので

残念です。

その点、大学図書館は土日も開館しており利用者へのサービスを重視しているといえます。

自宅には学生時代からの本が相当あります、何度も整理をしたのですが、いつも妻から本を整理（この場合の整理は処分を意味しています）せよと迫られています。学生時代の頃の岩波文庫と新書などは懐かしい思い出が詰まっています。学生時代には、伊藤整の本を随分読みました。彼は小樽高商から東京商大へと進学し商学を専攻したのですが小説家を目指しました。

彼の同郷には小林多喜二がいますが、思想的にのめりこむことはなく別の道を歩みました。今から思うとなぜ伊藤整の小説にひかれたか思い出せません。

野間宏の『真空地帯』や高橋克己の『憂鬱なる党派』を読んだときは、大変衝撃が走りました。それまでの高校時代では想像ができなかったあの昭和の暗い世相の中での時代感覚と閉塞感が漂う内容の小説でした。この二つの小説の時代背景は違いますが、野間の作品は軍隊の中で思考が停止状態に追いや

られる初年兵と古参兵などの状況をリアルに表現していますが、高橋の作品は党という思想集団の中で人間性がズタズタにされていく状況を記述しています。これらの作品を読み自分のこれまでの体験とはかけ離れた異質な世界が以前に存在していたという事実を小説は教えてくれました。しかし、これらの小説の読後感といえば、何とも形容できない観念が脳裏を駆けめ、憂鬱という言葉が自分を縛るように思えてならない状態が続き、しばらくは観念のウイルスが浸透するような錯覚に陥る時期もありました。これらの小説の呪縛から逃れようとして伊藤整を選んだかもしれません。

現在後継者問題で報道されている北朝鮮が話題に上る前から、この国に関する本を読み始め気がついた時には100冊を超えていましたが、家族の中では誰もこの国に関する書物に興味を持たず、仕方なく無理やり友人に預けてしまいましたが、その後本を読んでいるともいないとも言ってこないため、果たして彼がどうしているかわかりません。古い本などは物置においてありますが、それが再び日の目を見るることはなさそうです。

シリーズ学会紹介 その④

現代中国学会会務委員 木島 史雄

愛知大学現代中国学会は、学部創設にあわせ1997年に発足し、今年で14年目を迎える。講演会、シンポジウム、学会賞の授与など他の学内学会と同様の活動も行っているが、図書館との関わりの点からすれば、本学会の最大の特色は雑誌『中国21』の発刊にあることができる。

学内機関発行の雑誌といえば、通例は「紀要」というカテゴリーに入り、所属メンバーの論考や活動記録を掲載するものが主である。『中国21』はそれらと性格を殊にし、所属メンバー自身の論考よりも、部外者の執筆論文、研究ノート、インタビュー、座談などを主たるコンテンツとして、一般読者向けにひろく市販されている。今夏発行の最新号で33号、臨時増刊・中国語訳本なども併せて39冊を数える。本誌は研究論文集でもなく、出版社刊行の一般向け雑誌でもない。毎号、特定の特集テーマが設定され、学会メンバーである教員の見識に基づいてそのテーマを掘り下げるのに最適の執筆者が学内外はもとより、国外からも選ばれ、座談、インタビュー、論考などがくみ上げられる。学術雑誌や紀要に掲載される論文は、深く徹底した研究の成果として貴重なものではあるが、一般的の読者には受け入れられにくい。いっぽう市販雑誌記事は、取つきやすいという側面も持つが、内容が表面的であったり、性急な議論に陥ったものであったり、総合的な視野や発展性に欠くものであったりしがちである。それらの中にあって本誌は、高い学術的水準を保ちながら、丁寧に問題を掘り下げ、一般の人々にもわかりやすい書物として高い評価を得ている。これは、学術研究の成果を社会へ提供することを重視するという現代中国学部の運営方針に沿うも

のである。テーマも表面に現れてきた問題だけでなく、中国を広く深く理解するのに不可欠な要素を時流におもねることなく着実に設定しており、後年の時局の先駆けとなるテーマ設定も少なくない。記事の型式も、一筋縄では行かない大問題を考察・解明するためにインタビューや座談などが交じえられ、考察導入にも役立つよう工夫されている。更に特筆すべきは、このような特集体制が36号まで積み上げられてきている点にある。学術大系の硬直化の中で抜け落ちてしまいがちなさまざまな問題点を取り上げる作業を積み重ねてきた結果、『中国21』をひとり見渡すことで、中国に関わる隠された問題点の数々が浮き彫りとなり、さらにはその検討の糸口も得られるであろう。

さらに『中国21』が中国に関わる問題を時事的に取り上げるのに対し、それらを踏まえて包括的かつ系統的に現代中国のありさまを記述する書物として『ハンドブック現代中国』がある。この書物も2003年に初版刊行されて以来、三度の改訂を経て常に最新の情報を盛り込んだ現代中国事情入門書として定評を得ている。

学術研究の成果を社会へ提供することを重視するという現代中国学部の運営方針は、学部・学会活動の様々な場面で具現化されており、学会主催の講演会が基本的には学外者にも公開されて、多くの来場者を集めたり、エクステンションセンターでの連続講座の担当などにも見て取ることができる。笛島校地移転後は、教員、学生のみならず、社会とのつながりを更に深化・発展させ、本学部の特色を一層發揮させてゆくことになろう。

図書館のさらなる進化に期待しています

豊橋語学教育研究室 胡麻本 明子

図書館職員時代からかれこれ何年になるのでしょうか？

この時代に身に付いたこと、新聞の書評欄・広告には必ず目を通す、いろんな書店に立ち寄る……などは私のその後の人生を大変豊かにしてくれました。また書物の大海上に漕ぎ出すさまざまな検索手段を学ぶこともでき、図書館の方角には足を向けて眠れない(?)……という思いでおります。

その後いくつかの職場を経験した後、この1月に豊橋語学教育研究室に人事異動となり、今度は視聴覚資料の収集・提供という業務を担うこととなってまた図書館時代の楽しさを思い出しています。

先日は上京のついでに今話題の丸善丸の内本店「松丸本舗」に行ってきました。最近の書店は皆さんご承知のように相当変貌をとげていますが、ここはまさに異次元の世界でした。誰かの頭脳を切り開いてみたら、なるほどこうなっていたのかと思われるコーナーです。

書棚は人生の鏡……自分の書棚は人には見せたくないが、人の書棚は覗いてみたい、そんなこともチラッと頭をかすめます。

ともあれ「書棚を編集するとは、世界を編集することである。」という松岡正剛氏の挑戦を皆さんもぜひ機会がありましたら堪能してみませんか。

この丸善の大胆さの裏には、出版不況と電子書籍の大嵐のなかで「本屋は驚きを持って本と出会う場所であるべき」「本屋がつまらない場所になっていることが出版不況のひとつ的原因」(2010/8/28 朝日新聞)という社長の強い認識があり、これは図書館にも私の新しい職場……LL自習室の運営にも同様なことが言えるのではないかと痛感させられました。

次元が違うかもしれません、あるコンビニでのスイーツ誕生秘話のドキュメンタリー番組をたまたま見たのですが、マンネリ化させないための営業努力に大変感動しました。

整然と並んだ図書や雑誌、静寂な環境……確かにそれは必要なことです。

そこに如何にプロとしての味付けをしていくのか……課題が少し見えてきたような気がしました。図書館もがんばれ！

「図書館は生活の一部」

国際コミュニケーション学部
日高 由季



私にとって図書館とは、最適な勉強スペースであり、なくてはならない場所です。私は昨年愛知大学の提携校であるカナダのクイーンズ大学に1年留学をしていました。クイーンズ大学には学問別に何箇所か図書館があるのですが、四階建ての一番大きな図書館を主に利用していました。課題があるため、授業の後はほとんど図書館で過ごしていました。朝の八時から夜中の一時まで開いている図書館は学生にとってとても便利な場所でした。英字新聞の記事を選んでレポートを出すという課題があった際、図書館にはThe New York TimesやToronto Starなどたくさんの種類の新聞が置いてあったので、よくクラスメイトと一緒に選んでコピーをしていました。また、一階にはパソコン付きの机がたくさんあったので、リスニングの練習をしたり、テキストやプリントを横に置きながらレポートを作成したりしていました。時には二階や三階の個別机で一人集中することもありましたが、私が最も好きだった場所は一階にあった窓際のソファーです。疲れた時に外を眺めながら休憩をすることもありますし、小説や教科書を読む時も大抵ソファーに座って行っていました。昼休みに友達と宿題をしたり、グループ活動の話し合いをしたり、コーヒーを片手に課題に覆われ勉強をした場所、それが図書館でした。また、帰国した今では愛知大学の豊橋図書館も大いに利用しています。教員採用試験の勉強のため、講座のDVDを見るために視聴覚コーナーを利用しましたし、雑誌コーナーにある教職雑誌も活用しました。更に、一生懸命頑張っている仲間と共に勉強をすることで、自分のモチベーションを上げて取り組むことができたため、図書館があつて本当に良かったと思っています。



Stauffer Library

図書館の楽しみ方

中国研究科 加藤 明子

もともとは物語や小説を読むのが好きで、小さい頃から町の図書館、学校の図書館に通っていました。大学の卒業論文では本の装丁について書いたくらい、本にはこだわりを持っていました。たくさんの本に囲まれて、タイトルと背表紙から想像を膨らませ、それだけで楽しい気持ちになれました。

大学院に進学して、読む本は小説から専門書へと変化しましたが、図書館通いは変わりません。専門書には心ときめくような装丁の本はありませんが、その内容は知りたかったことや知らなかったことを知って、もっと知りたいと思うものがほとんどです。読む本ごとに新しい発見があり、どんどん欲張りになっていく気がします。



大学院での私の研究テーマは、中国の陶磁器です。陶磁器の研究には、実物を見ることがとても重要で、所蔵美術館にお願いして見せてもらうこともあります。けれども、すべて見せてもらえるわけではありません。その場合、美術全集などの図版で代替することになります。大学図書館に中国図書はたくさんありますが、その中の美術書となると決して多いとは言えません。美術書は本全体が大きくて価格も高く、個人で持つにはかなりの負担が感じられます。できるだけいい図版を見たいと思うと、なお一層のことです。

このように欲張りで愛知大学においては特殊な研究分野の私に対し、大学図書館は大いに応えてくれます。所蔵場所がわからなかつたら教えてもらえるし、他大学の本も借りてもらいます。じっくり読みたい本は購入してもらうことができるし、大きな図版の高価な美術書も見ることができるようにになりました。とても満足しています。

大学図書館には専門書にのめり込んでいく楽しさがあります。本当に知りたいと思うことがあったら、カウンターで職員の方に相談することをおすすめしたいと思います。

「読む」とは人生の宝庫

会計研究科 神宮司 歩

私が、最初に手にした本は、イソップ物語の『都会のねずみと田舎のねずみ』だ。

字を覚えたいという強い欲求に目覚めた4つのとき、祖母に一生懸命「あいうえお」から教わり、夢中で字を覚えた。毎日下手くそな字を書きなぐり、50音字が目に見えて自分のものになっていき、「わかる」というプロセスが何よりも面白くて仕方なかった。

字を覚えると、途端に今度は読んでみたいという強い欲求に駆られ、初めて自分の口で脳と一体化して「読む」という行為にひたすら感動したことを、今でも覚えている。一生懸命、一字一句、つたない音読ではあるが自分の力で丁寧に読み切った本は後にも先にもこれだけである。初めて読んだ本というのは、強烈に印象が残るもので、大人になった今でもとても愛着のある一冊となっている。

読書というのは、幼少時に触れるほど強く記憶に刻まれ、感受性豊かに育つ手助けをしてくれるものだと実感する。私たちに字を覚え、読み、知るという大きな感動をもたらし、言葉から繰り出されるストーリーを想像することで、無知からの成長の道を示してくれるものとなる。自身の形成課程において、もともと身近に存在し、お手本となるのは「本」であるといつても過言ではないだろう。

歳を重ねるにつれ、知識ある読書が増えるため、幼少時の大感激までとはいかないが、時間を見き、環境にともない何度も読み返すことで、今度は何とも味わい深い感動を与えてくれるものへと変化していくのも読書の醍醐味である。また、本から得られる人生のヒント、ひらめきや新たな発見に遭遇することで、より豊かな心を養う機会に出逢うこととなる。活字離れが囁かれる今、「読む」ことの大切さ、図書館はまさにその宝庫でもあるということを改めて認識してもらいたい。

豊橋図書館の「玄関」が変わります！

豊橋図書館の自動ドアを通り過ぎると、目の前に入管ゲートをイメージさせるような「入口」「出口」があります。利用者のみなさんはそれぞれ「入口」にあるゲートを通って館内へ、あるいは「出口」のゲートを通って館外に出るしくみになっています。うっかり手続きを済ませないまま図書館の本を持ってゲートを通ると大きなブザーが鳴り、ゲートが閉じて「足止め」されてしまいます。時折、この「足止め」にあって驚いたり動揺したりする学生を見かけます。



この「足止め」の正体は、「無断持出探知システム (Book Ditection Systemの略。以下、「BDS」という。)」と呼ばれ、豊橋図書館をはじめ多くの大学図書館で採用されているシステムの仕業なのです。豊橋図書館では、1999年より11年もの間、図書館の「玄関」役として、利用者をずっと見守ってきました。導入当初こそ最新装備を有した機器でしたが、既に導入から10年以上が経過し、現在では、万が一故障が発生した場合の部品の調達が難しくなるおそれがあることが判明しました。

この状況を踏まえ、豊橋図書館では2011年2月をめどにBDSを更新します。これにより、入館・退館方法が大きく変わります。新しいBDSでは、図書館の入館・退館時に身分を証明するカード(学生証、教職員証、社会人利用者証など)を「入口」「出口」のゲート横にある機器にかざし、利用者を確認した後すぐにゲートが開く方式となります。これにより、学生や一般利用者

になりすまして館内に入る不審者を防ぐことができます。最近、学内だけでなく図書館内においても、不審者と思われる者による盗難などの被害が発生しておりますが、BDSの更新により、不審者の入館を未然に防ぐことが可能です。一方で、図書館を訪れた来訪者や、新しく社会人登録を行う方々については、遠隔操作によりカウンターからゲートの開閉が可能です。現在車道図書館では、この方式を利用したBDSを採用しています(添付の写真2枚は車道図書館のBDSです)。

新しくなったBDSにつきましては、あらためて愛知大学図書館のホームページにてご紹介いたします。そうそう、大事な注意事項がありました。利用者の皆さんには、必ず身分証明カードを携行してくださいね。そうでないと、どれだけ粘っても図書館の中に入れないので、宜しくお願いします。

豊橋図書館 宮部 浩之

編集・発行 愛知大学図書館

2010年11月15日発行 No. 37

- | | | |
|---------|----------------------------|-----------------|
| ■豊橋図書館 | 〒441-8522 豊橋市町畠町字町畠1-1 | ☎(0532) 47-4181 |
| ■名古屋図書館 | 〒470-0296 みよし市黒篠町清水370 | ☎(0561) 36-1115 |
| ■車道図書館 | 〒461-8641 名古屋市東区筒井二丁目10-31 | ☎(052) 937-8116 |

URL <http://library.aichi-u.ac.jp>